

English Garden 第40話

"Tiger! Tiger! burning bright
In the forests of the night,
What immortal hand or eye
Could frame thy fearful symmetry?"

William Blake

「虎よ、虎、輝き燃える、夜の森のなかで。
いかなる神の手、あるいは眼が
汝の怖ろしい均整をつくり得たのか」
ウィリアム・ブレイク (土居光知訳)

今年のエトのトラにちなんで、今回は虎の話題をお届けします。表題の言葉はウィリアム・ブレイク(1757～1827)の詩集 "Songs of Experience" (経験の歌) 中の "The Tiger" の冒頭の部分です。英詩で虎といえば、まっ先に挙げられるほど有名な詩です。

この詩の中で、詩人は虎のらんらんと輝く目、たくましい足、ひきしまつて恐ろしいまでに均整のとれた体をたたえています。この美しさこそは、まさに神の業にほかならないことを見るのですが、また、あまりの恐ろしさに、果たしてこれが神の業なのか、子羊を造った神の納得した作品なのか、との疑問も投げかけています。その部分を、名訳の誉れ高い土居光知氏の訳とともにご紹介します。

When the stars threw down their spears,
And water'd heaven with their tears,
Did he smile his work to see?
Did he who made the Lamb make thee?
無数の星その槍を投げつくし、涙で空をうるおしたとき、
神はできあがった汝をみて ほほえまれたのか、
子羊をつくりし神が汝をつくったのか。



すぐれた画家でもあったブレイクは、実際に目に見えるように虎を描き出しています。

ブレイクの紹介は次回にゆずることにして、今回は月刊誌 "National Geographic" (ナショナル・ジオグラフィック) がちょうど12月号に "wild Tigers" の特集を組んでいますので、その話題をお伝えします。

現在、野生のトラの数は正確にはわかっていませんが、5,000～7,000頭といわれています。トラはアジアの広い一体に分布しており、半数以上がインド或いは隣接するネパールとバングラデシュに生息すると考えられます。

1940年代にはまだ8亜種が健在でしたが、その後、バリトラとカスピトラ、ジャワトラが絶滅し、アモイトラも絶滅寸前です。残っているのは、ベンガルトラ、マレートラ、スマトラトラ、シベリアトラですが、いずれも絶滅の危機に瀕しているのです。

トラは住みかの森を切り開かれ、獲物となる動物が減って、人間の住む地域の近くまで出てこなければならなくなりました。近くに暮らす人びとは、家畜だけでなく人の命も危険にさらされるので、対抗せざるを得ません。しかも、トラの骨や内臓は漢方薬に使われるため、密猟者も後を絶たないのです。

野生のトラを生き延びさせるには、人間の保護が絶対に必要なので、地道な観察を続けて保護をする活動が、各地で繰り広げられています。しかし、どこでも財政事情はかなり苦しいようです。"National Geographic" の12月号にはそうした活動にたずさわる人びとの仕事ぶりが、トラのたくさんの写真と共に紹介されています。